

# FASHION ABOUT FACE



紳士諸君! ストリート全盛の時代がきた

## ファッション改革の春

年齢も国も性別も超えて多様化するファッションは世界の映し鏡。ローがハイになり、ストリートがラグジュアリーになり、フェミニンがマスキュリンになったこの時代、紳士が着るべき服も持つべき小物も180度大転換! いまを語る264点の新作カタログから、どう着るべきかの服装術まで、時代の前髪をつかむファッション大特集である。

特集のはじめに

## メンズウェア革命が起きている

100年前の女性ファッションに起きたことがいま男性ファッションに起きているのではないかと、とかがえる服飾史家・中野青織の論に耳を傾けて、若き紳士たちよ、まずは頭をやわらかくもみほぐしてください。

Words 中野青織 Kaori Nakano

**ウ**ェブで服が買える時代になっても、店舗に行列が見られることがある。近年、ファッションのために長い行列を作るのは、男性の方が多くはないか。ルイ・ヴィトンとSupremeとのコラボ製品のために、日本でも表参道に連日、8000人前後の行列ができた2017年の夏は記憶に新しい。

いまファッションの世界で興味深い現象は、メンズの領域から起きている。メイクまで視野に入れるならば、2018年はシャネルはじめいくつかのブランドがメンズ化粧品を出した。スキンケアはもう定番、その延長のアイシャドウなどのメイクアップ製品が続々お目見えしている。顧客も、ドラッグやトランスジェンダーばかりではなく、身だしなみを気遣うビジネスパーソンから、ただメイクが好きというジェンダー・ノンコンフォーミング（既存のジェンダーにあてはまらない）な新世代まで、多様に広がる。

メンズファッションは、マーケットとしても成長著しく、文化的現象としても話題に事欠かないのである。そんなメンズの近年の動きを概観する本も出版されている。ジェイ・マコーレー・ボウステッドによる『メンズウェア・レヴォリューション』（ブルームズベリー）。著者はロンドン・カレッジ・オブ・ファッションの講師であり、自身もファッション業界で働いた経験をもつ。2000年代以降にダイナミックに変化し続けるファッション業界やメディアの状況、男性の身体感覚、そして「男性らしさ」を、豊富な具体例を通して整理する。

歴史との比較対照もユニークで、2013年のラフ・シモンズを、1世紀前のココ・シャネルやマドレーヌ・ヴィオネに喩えている。シャネルやヴィオネは女性服を旧来の堅苦しい構造から解放し、女性服に軽やかさとセクシーさを与え、女性を心身共に解放した。同様にシモンズは、制服のような男性服のシステムを排し、男性服に柔らかさや華やかさを打ち出し、男性に自己を表現する自由を与えた、と著者は論じる。そう見るとたしかに、20世紀初頭の女性服デザイナーたちが自由を謳歌する女性を生み出したように、21世紀の男性服デザイナーたちは、自己表現に長けたしなやかな男性像を生み出している。

## はじめはエディ・スリマン

そのように、今たしかに進行している現象を「革命」とみるならば、はじめは、繊細で傷つきやすい男性像をポジティブに表現した、2001年からのディオール・オム時代のエディ・スリマンであるように思う。

戦後のメンズファッション史において、「革命」が起きた時代はいくつかあった。1960年代には男性が雄孔雀のように華やかに装うピーコック革命なるものがあつた。1980年代には、アルマーニが先導した「スーツの脱構築」革命があり、スーツにセクシーさと個性が加わった。1990年代には巨大資本によるブランドの獲得競争が激化し、世の動きを読むに長けたビジネスマンであるグループのトップが、メンズウェアの可能性に目をつけ、広告やマーケティングに資本を投下し、新進クリエイティブディレクターを抜擢した。2001年のディオール・オム創設とともに起用されたエディ・スリマンは、まさにその流れの中に位置づけることもできる。

スリマンが開いた、男性像の幅を大きく広げる革命の扉。それが進行し、ひとつのピークに達したのが、2018年。ルイ・ヴィトンのメンズ・クリエイティブ・ディレクターに就任したヴァージル・アブローが6月のパリでおこなったデビューコレクションではなかっただろうか。7色に塗り分けられた長いランウェイを、南極大陸を除くすべての大陸出身のモデルが歩いた。このブランド初の黒人ディレクターは、「多様性と包摂」が声高にうたわれる社会背景とメンズモードをシンクロさせ、エモーションに視覚化してみせた。

巨大資本のマーケティング力を背景に多士済々が活躍し、いまやジェンダーの壁どころか、和と洋の壁、季節の壁、ジャンルの壁、年代の壁も崩壊し、百花繚乱の多様性の可能性が広がる。いわば、なんでもありというのが2019年春夏のメンズモードである。格段に広がった選択肢に、自由を見て新たな挑戦に飛び込むか、混乱を見て後退するか、嘲笑して見送るか。革命をどの方向に導くのかは、フォロワーの姿勢にかかっている。

2018年6月21日にパリのルイ・ヴィトン・グランド・パルで開催されたルイ・ヴィトンの2019年春夏メンズコレクション、7色に塗り分けられた長いランウェイを、南極大陸を除くすべての大陸出身のモデルが歩いた。

## 中野青織

〈株〉Kaori Nakano 代表取締役、服飾史家として研究・執筆・講演をするほか、企業のコンサルティング・プロフェッサー（顧問教授）を務める。ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を歴任。著書に『モードとエロスと資本』（集英社新書）ほか。